

倉住薫 提出 学位申請論文（課程博士）

『柿本人麻呂研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、万葉集の歌人柿本人麻呂を三部に分けてその作品、および研究史に言及し、総合的な人麻呂研究を展開するものである。第一部 柿本人麻呂作歌の研究―作品論的考察―、第二部 柿本人麻呂歌集の研究―作品論的考察―、第三部 近代の柿本人麻呂研究者の一視座―武田祐吉の人麻呂研究―の構成となっている。また、各部は各四章の論文を配して、作品論的に考察する方向をもって一貫する。即ち、第一部で取り上げた作品は、第一章 石見相聞歌、第二章 泣血哀慟歌、第三章 出雲娘子の火葬を詠む歌、第四章 明日香

皇女挽歌であり、第二部では、第一章 柿本人麻呂歌集の研究史、第二章 卷第十卷頭歌群、第三章 卷九雜歌部舎人皇子歌群、第四章 卷七の旋頭歌―一二九四番歌―、第三部では、第一章 武田祐吉の文学研究、第二章 卷向歌群論、第三章 「柿本人麻呂の妻」論、第四章 國學院大學図書館武田祐吉文庫所蔵の書き込み調査となっており、武田論の作品研究の意義と、その現在の有効性を再確認する方向を示している。なお、付表として武田祐吉年譜が加えられ、研究者の足跡が資料として示されている。

第一部、第一章の石見相聞歌は、人麻呂が石見の国から妻と別れて上京するときの二首の歌群（長歌と反歌）を指す。これは第一歌群と第二歌群に分け得、第一歌群のA（一三一―一三四）、B（一三八・一三九ⅡAの異伝）を対象とする。この歌群には従来A、Bの関係は成立の先後の問題に焦点が当てられているため、歌の主題や解釈と深く関係する歌表現の検討が不十分であったとする見解から、その表現の検討を通して両歌群の主題に迫ろうとする。即ち、AB

の心情表現語である「偲ふらむ」と「嘆くらむ」を取り上げ、万葉歌の用例によってその分析を試み、「偲ふらむ」(A)は相手に対する希求の心情を表出するのに対して、「嘆くらむ」(B)は相手が既に存在していない場合の表現であって、妹との関係が隔絶してしまったと認識する故に「嘆く」のであって、この二つの心情の差が主題と通底するとし、即ち、二つの歌群がそれぞれの主題を設定した作品であると主張する。

第二章 泣血哀慟歌は、人麻呂が妻の死を詠んだ歌で、二群の長・反歌からなっている。即ち、本文歌(二二〇～二二二)と、或本歌(二二三～二二六)を対象とする。この歌群に対して従来は推敲ととらえたり、成立の先後関係を論じたりする説が主となっているが、本文歌群と或本歌の表現の差を検討することによって、それぞれの主題を明らかにしようとした。具体的には本文長歌の表現の「たまかぎるほのかに」と或本歌の「灰にていませば」をとりあげる。「たまかぎる」は、対象を視覚的にとらえつつも、その対象を回想の中で希薄な映

像として浮かび上がらせる。一方、「灰にいていませば」の「灰」の表現は火葬を意味し、動かすことも触れることも許されない現実としての妻の死の認識である、と説く。その認識の確認は各歌の呼称にも表れており、その確認を検証した上で、二群の作品は死を別々の面からとらえた二つの挽歌であること、したがって、既存の学説のどちらにも加担しない立場を主張するものとなっている。

第三章 出雲娘子の火葬を詠む歌は二首の短歌である。他に河辺宮人が姫島において屍を見て詠んだ歌が卷二と卷三にあり、この両者の比較を試みる。二首の配列は従来順序が逆なのではという指摘もあった。しかし、娘子の死を哀惜するという立場からの発想とみれば矛盾はなく、この配列に人麻呂の歌世界があると見、彼女がどのような存在として描かれるのか、の視点で問い直す。

火葬による死の認識は万葉歌においては雲、撒く、灰の語がそのシンボルとなっている。しかし、人麻呂は「たなびく霧」、「八雲さす出雲の子らが黒髪」

で表す。手の届かないところの霧、共寝を想起させる心象的表現、これらは水死の表現ではない、と見る。河辺宮人の歌も溺死した娘子を歌い、その土地に定位させ伝説化するという構想は共通するが、人麻呂ははかなく消える景によって描き、河辺宮人は永遠に存在し続ける土地の象徴的な景物によって永遠の偲びを歌う。出雲の娘子挽歌が霧・藻のようにはかない景で表わすのは、それが叙情性を持つ故であり、相聞的叙情への傾斜がある、と見る。

第四章、明日香皇女（天智皇女）は天武四年（704）四月に薨じた。人麻呂の挽歌制作年的には一番新しい。

この長歌は明日香川の描写、生前の様子、遺された者の悲しみ、永遠の偲び、の四段の構成になっている。他の人麻呂挽歌と比較すると、偲びを「形見Ⅱ明日香川」で表したところに独自性を見る。人麻呂は場所（地名）を形見とする表現をとったが、これは共にあったことによる記憶の形見であり、川藻によって皇女生前の姿を造形することによって、地名に託した皇女の偲びとした挽歌、

と見る。

第二部は柿本人麻呂歌集歌を考察する。第一章では柿本人麻呂歌集の研究史を現代まで見通す作業となる。人麻呂歌集は近世以来その用字法が次第に注目されてきたもので、とりわけ昭和三十年以降、いわゆる「略体」「非略体」のタイムでその用字意識を対象化してきたこと、さらに近年は歌木簡の発掘によって、万葉仮名の用字をめぐる新たな研究状況が表れてきていることを紹介する。

第二章では巻第十巻頭歌群七首（春雑歌）の構成の意図を検討する。まず、人麻呂歌集独自の用字を含む「霞霏霰（かすみたなびく）」は、春の到来を意味する景の表現だが、この用字は恋情を表さずたなびく景そのものであることを指摘した。この視点は、巻頭歌群七首全体におよぶ。従来、この歌群の表現から相聞性があるとする見方が古くからあった。しかし、一方では雑歌の中の位置づけとして相聞性を否定する見方もあった。たしかに、この歌群の山の

名はいずれも妻問いを連想させるものだが、七首の歌群は霞が妻問いの山を来訪することで季節の到来を表現しているのであって、相聞歌の霞とは恋情の質を異にしている。そこに「霏霰」の用字の意義があった、とする。

第三章卷九舎人皇子歌群は人麻呂歌集歌のいわゆる非略体の書式である。従来この三首が七夕の宴で詠まれたとする説が提出されているが、それは発想法を借りたものである、と見る。たしかに皇子への献歌の二首は恋歌的発想をもとに詠まれた歌とみることができるが、皇子自身の歌は一首目を季節の到来を喜ぶ歌として詠みかえ、二首目を恋歌とし七夕歌の発想と捉えかえし、その上で舎人皇子の作歌宮為があったのだと見る。つまり七夕歌をモチーフとした、とする理解がキーとなるという提案である。

第四章は月をテーマとした卷七の旋頭歌（一二九四）が、七夕歌の発想によっていることを論じる。当該歌の訓が定まっていないうが、諸注を検討しつつ「朝月の日向の山に 月立てり見ゆ」を選択する。つまり、「日向山」を中心に「月

立てり見ゆ」は天体の運行を示す表現であり（「朝月の」は枕詞）、四句の「遠妻を持ちたる人」によって、妻問いへの期待をこめた意図が表れ、そこに七夕歌と通底する発想を見る。ここには、旋頭歌がその集団的発想からはなれ、個的な叙情性を持つ歌へと展開する過程を見る説（青木周平氏もその一人）への検証となっている。

第三部は國學院大學教授武田祐吉（明治十九年（1886）五月五日〜昭和三十三年（1958）三月二十九日）の国文学上の研究業績の確認作業と、柿本人麻呂研究の意義とそこから見いだされる課題を二点に絞って論考化したものである。

第二章巻向歌群論は、武田祐吉の『柿本人麻呂』（昭和十三年）と『柿本人麻呂攷』（昭和十八年）に示されている見解であり、人麻呂の愛する女性が巻向にあったことを作品群から導き出している。これは武田祐吉が人麻呂歌集を人麻呂作品として積極的に取り入れたことによる。論者はこの視点を踏

まえて、武田が取り上げていない巻向歌を対象化し、あらたな巻向歌群（巻七・十・十一）を設定して、人麻呂の相聞世界を展開した。

第三章の「柿本人麻呂の妻」論は、同じく二つの著書に論じられており、論者はまず武田祐吉の「柿本人麻呂の妻」論を紹介し、「泣血哀慟歌」を捧げた妻こそが本妻であったとする実体的見解を踏まえて、論者は人麻呂の妻をどのように造形化しているかを歌表現を通して論じた。

第四章は『萬葉集全釈』（鴻巣盛廣）『万葉集新解』（武田祐吉）への書き込みから、『増訂萬葉集全註釈』（武田祐吉）へとり入れられていく過程を検証し、終生万葉集研究を怠らなかつた武田祐吉の学問的姿勢を見いだしている。

論文審査の結果の要旨

本論は、作品研究の立場から、人麻呂の作歌とされる第一部と、人麻呂歌集

の歌の第二部とを据えて、人麻呂研究の総合を目指そうとしている。その場合、論者の方法は対象となる作品の研究史を確認した上で論者の方向性を打ち出し、ついでその作品の表現上の主要な歌句部分を取り上げ、事例を集積した上で論考を重ね、自己の見解を明らかにするという方法で各章の論考は一貫している。この着実な論証の姿勢は評価しうる点と言えるだろう。

第一部、第一章石見相聞歌、第二章泣血哀慟歌では、表現の差異は主題の差異、という認識を導いている。この論証過程で、単に表現語義の検討にとどまらず、その分析を越えて主題の差異へ言及し得たところに、論者の問題追求の姿勢が見いだされ、今後の研究への期待が持てるところである。そこで、次なる問題は、「異伝」として万葉集に記載されているという事態がなぜ起こっているか、という基本問題に立ち返ることだろう。挽歌としての表出から、伝承の過程、文字資料への過程、をどのように想定し論理化するかの問題が立ち現れる。古代文学ならではの異伝成立過程への視座が改めて現前化することにな

るだろう。そのためには対象歌だけではなく、多様な事例検討を踏まえる必要があり、万葉歌のあり方を総体的にながめる視点が求められる。

第三章出雲娘子の火葬を詠む歌、第四章明日香皇女挽歌においても右の手法と同様だが、ここにも万葉歌人の表現方法として共通して見られたところの、地名との関わらせ方がある。例えば『古事記』・『日本書紀』・『風土記』等に見られる地名起源譚の発想と同類の基盤を持つことが指摘でき、古代文学ならではの発想法が見いだされてくる。広い意味では様式論の範囲だが、ここにもより広い視野で万葉歌のあり方への迫り方が求められる。

第二部第一章は柿本人麻呂歌集の研究史である。問題点をいわゆる「略体」、「非略体」とよばれる表記法の、問題発見のルーツに絞って分かり易い解説となっている。しかし、論者には第三部に取り上げた武田祐吉の人麻呂研究との整合性が今後求められてくることから、その拠点を明確にする必要が出てくる。表記に関わる問題はきわめて精密になってはいるが、単純化すると、人

麻呂歌として見るのか否か、にある。武田は人麻呂歌と見た上で研究を進めた。今後の取り組みの要点となる。

第二章の卷第十巻頭歌群の語義検討は着実な手法であり、基礎的な読解に適っている。一方ここには、古代和歌における季節表現の様式性という問題がすでに指摘されている。この問題は万葉集の編纂上、季節分類表現のルーツと、古今集以前の歌語の発見という和歌史上の問題が次なる展開を待っている。

第三章の卷九雑歌部舎人皇子歌群と第四章の卷七の旋頭歌の両論には、万葉集において「七夕歌」がその季節的な星祭りの宴席を離れて、恋歌のモチーフとして潜在化していることを読みとろうとし、ユニークな論となっている。

第四章の旋頭歌に関しては、万葉集中の歌形の表現史への視点がある。この歌形に対して現在も集団的発想形式から個人歌への移行過程を論じる方向性を見せている。論者は青木周平論に導かれる形で、個的叙情性への過程を論じる方向をとっているが、歌形全体のあり方からの検討が今後の問題として残って

いる。

第三部の第一章から第三章において、武田祐吉に関する研究業績とその内実を近代における柿本人麻呂研究の一視座とした点は、武田祐吉が『柿本人麻呂』を著し、人麻呂作歌のみならず、人麻呂歌集を包括する立場で「人麻呂像」を描き出そうとした点が再評価されてしかるべきとする論旨を汲んでの論として生きている。

しかし、第四章における武田祐吉文庫所蔵本の書き込み調査については、調査対象が十三点確認されており、たしかに書き入れの最も多い鴻巣盛広『萬葉集全釈』を取り上げた理由は理解できるが、第三部全体で意図されている《武田祐吉の柿本人麻呂研究の再評価》という論旨を踏まえると、希薄感が残る。

武田祐吉文庫の調査は、平成十四年度から十九年度で行われた、國學院大學21世紀COEプログラムのプロジェクトの一つであった。学内資産の再評価という意味づけのもと、行われた研究内容はすでに研究史として蓄積されており、

その意義を充分におさえた上で、今後の課題として継続されることが望ましい。しかし、学問上の先人としての武田祐吉の所論を踏まえての再検討の姿勢は、論者の今後の研究の展開が新たな人麻呂研究への一石となる可能性を持つものとして期待できる。

万葉集中最大の歌人である柿本人麻呂は実に多くの研究を生んでいる。その歌人を研究対象にすることは、万葉集の作品研究の王道と言えよう。研究の基礎的な方法と今後の展望をしっかりと身につけていると判断し得る。以上によつて、提出者倉住薫氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十二年二月十八日

主查 國學院大學大学院客員教授 近藤 信義 ①

副查 國學院大學教授 辰巳 正明 ①

副查 國學院大學兼任講師 城崎 陽子 ①